日本テレビ
「日本の年輪 風雪二十年」
放送全記録

日本テレビ
「日本の年輪 風雪二十年」
放送全記録

目　次

第１章　放送リスト

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
1	S34.10.03(土)	22:15～23:00	走馬灯	田鶴浜弘 別当珣子	・番組の総予告編で、第一次世界大戦以後の日本の歩みを、豊富な記録フィルムで総括的につづる。 ・東海テレビでは放送せず。
2	S34.10.10(土)	22:00～22:45	百姓昭明シテ万邦協和ス	田鶴浜弘 別当珣子	東海テレビはこの回から放送開始。
3	S34.10.17(土)	22:00～22:45	俺は河原の枯すすき	田鶴浜弘 別当珣子 栗島すみ子	
4	S34.10.24(土)	22:00～22:45	万国の労働者よ団結せよ	田鶴浜弘 別当珣子 岩田宙造 水谷長三郎	
5	S34.10.31(土)	22:00～22:45	統帥権干犯	田鶴浜弘	
6	S34.11.07(土)	22:00～22:45	赤い灯、青い灯	田鶴浜弘 別当珣子 藤原義江 古川ロッパ 玉川一郎 小唄勝太郎 古賀政男 渡辺はま子	『古川ロッパ昭和日記　補完・晩年篇』の当日の日記に、番組出演に関しての記載がある。日記の内容から生放送であったことが分かる。
7	S34.11.14(土)	22:00～22:45	満州某重大事件	田鶴浜弘 別当珣子 伊藤痴遊	・満州事変発生に至るまでの中国の動きを、当時の貴重なフィルムを使って描き出す。 ・三氏が出演、日本に遊んだ頃の若き孫文や、張作霖の人となりを語る。
8	S34.11.21(土)	22:00～22:45	生命線満州	田鶴浜弘 別当珣子 長岡隆一郎？	・日本の生命線と当時言われていた満州の昭和5年から6年頃の実情を、その時のフィルムでたどる。 ・当日の朝日新聞名古屋版には出演者として”長岡”とのみ表記されているが、満州国総務庁長を務めた長岡隆一郎のことかと思われる。
9	S34.11.28(土)	22:00～22:45	満州に戦雲動く	田鶴浜弘 別当珣子	
10	S34.12.05(土)	22:00～22:45	満州事変	田鶴浜弘 別当珣子 伊藤痴遊	
11	S34.12.12(土)	22:00～22:45	戦火、上海にとぶ	田鶴浜弘 別当珣子 伊藤痴遊	
12	S34.12.19(土)	22:00～22:45	うつりゆく世相・農村の顔	田鶴浜弘 別当珣子 丸岡秀子 島田屯 河村久子 佐原妙子	・昭和初期の不安な時代の庶民の姿はどんなものだっただろうか。こうした庶民の姿を、世相を背景に2回に渡って描く。 ・1回目は「農村の顔」と題して当時の農村の実情をドラマで演出する。 ・農夫与作：島田屯、母親：河村久子、娘トシ子：佐原妙子　ほか。

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
13	S34.12.26(土)	22:00〜22:45	うつりゆく世相・太陽のない街	田鶴浜弘 別当珣子 阿部静枝	当日の朝日新聞名古屋版では、サブタイトルが「うつりゆく世相・都会の姿」となっている。
14	S35.01.02(土)	22:00〜22:45	お笑い昭和史	田鶴浜弘 別当珣子 玉川一郎 柳家金語楼 榎本健一 古川ロッパ 徳川夢声	・「カジノ・フォーリー」「笑の王国」などの浅草を中心にした喜劇が盛んだった昭和初期を中心にした「お笑い昭和史」。 ・ゲストに当時を語ってもらうとともに、「カジノ・フォーリー」の傑作、エノケンの「最後の伝令」をエノケン自身トムの役で再現する。 ・当日の毎日新聞東京版及び朝日新聞名古屋版では、サブタイトルが「お笑い・大正から昭和へ」となっている。 ・『古川ロッパ昭和日記　補完・晩年篇』の当日の日記に、番組出演に関しての記載がある。日記の内容から当日の昼に収録していたことが分かる。
15	S35.01.09(土)	22:00〜22:45	うつりゆく世相・回想	田鶴浜弘 別当珣子 佐竹明夫 高橋昌也 織本順吉	
16	S35.01.16(土)	22:00〜22:45	日本の若人	田鶴浜弘 別当珣子 天野貞祐 牧野正蔵	
17	S35.01.23(土)	22:00〜22:45	マイン・カンプ、ヒットラー	田鶴浜弘 別当珣子 中野五郎	十一月革命に失敗したヒトラーが、ランズベルクの監獄で想を練って書き上げた著書「マイン・カンプ」を中心に、彼のナチ政権が誕生するまでの経過を記録フィルムでたどり、世界を戦火に巻き込んだ帝国主義の背景を探る。
18	S35.01.30(土)	22:00〜22:45	国家改造法案	津久井竜雄 横田洋	・五・一五事件、二・二六事件の思想的背景をなした北一輝の「国家改造法案」をテーマに、彼と西田税の生涯を通して昭和初期の日本の歩みを描く。 ・当日の朝日新聞名古屋版では、サブタイトルが「日本改造法案」となっている。
19	S35.02.06(土)	22:00〜22:45	問答無用	別当珣子 横田洋 菅原裕 林逸郎	五・一五事件をドラマで再現しながら、その時代的背景や当時の模様について三氏に聞く。
20	S35.02.13(土)	22:00〜22:45	リットン報告書	田鶴浜弘 森島守人 長谷川進一	田鶴浜弘の記載は、当日の朝日新聞西部版朝刊の南海テレビの欄にのみ確認。
21	S35.02.20(土)	22:00〜22:45	星と錨	別当珣子 松下芳男	
22	S35.02.27(土)	22:00〜22:45	満州帝国	別当珣子 駒井徳三 清水薫三	
23	S35.03.05(土)	22:00〜22:45	東郷平八郎	別当珣子 伊藤痴遊	

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
24	S35.03.12(土)	22:00～22:45	ムーランルージュ・赤い風車	別当珣子 玉川一郎 尾崎宏次 左卜全 由利徹 野々浩介 千石規子 明日待子	日本の軽演劇界の一ページを飾るムーラン・ルージュ（赤い風車）が昭和8年10月に上演した伊馬鵜平（春部）作「猫と税金」を再現する。
25	S35.03.19(土)	22:00～22:45	国体明徴	古谷綱正 別当珣子	
26	S35.03.26(土)	22:00～22:45	昭和維新（天誅）	古谷綱正 別当珣子 高宮太平 伊藤痴遊	
27	S35.04.02(土)	22:00～22:45	昭和維新「兵に告ぐ」	古谷綱正 別当珣子	「昭和維新」の第2回で、日本のファシズム制圧の大きな動機となった日本軍閥内部の皇道派将校によるクーデター、二・二六事件を取り上げ、事件の背景から経過を見せる。
28	S35.04.09(土)	22:00～22:45	粛軍	古谷綱正 別当珣子 古田徳次郎	
29	S35.04.16(土)	22:00～22:45	第三帝国	古谷綱正 別当珣子	
30	S35.04.23(土)	22:00～22:45	ベルリン・ローマ枢軸	古谷綱正 別当珣子 中野五郎	
31	S35.04.30(土)	22:00～22:45	万里長城を越えて	古谷綱正 別当珣子 清水薫三 伊藤痴遊	当日の朝日新聞大阪版及び名古屋版では、サブタイトルが「万里の長城を越えて」となっている。
32	S35.05.07(土)	22:00～22:45	非常時歌絵巻	古谷綱正 別当珣子 葦原邦子 江戸川蘭子 水の江滝子 小夜福子 松平晃 ディック・ミネ 音丸 渡辺はま子 古川ロッパ 東京混声合唱団 ビクター児童合唱団	・昭和8年から11年頃にかけての時代の変遷を当時の流行歌の中にたどってみようという趣向。 ・当時の少女歌劇の花形、流行歌手、ジャズ歌手などが出演して”非常時時代”のなつかしい歌の数々を歌う。 ・水の江、小夜、江戸川の3人は、華やかなりし当時のレビューの思い出を語る。 ・曲目：「皇太子さまお生まれになった」「さくら音頭」「国境の町」「サーカスの唄」「おゝ宝塚」「花詩集」「ローズマリー」「タンゴ・ローザ」「ダイナ」「上海リル」「奥様お手をどうぞ」「船頭かわいや」「花嫁行進曲」「花言葉の唄」「二人は若い」「忘れちゃいやヨ」「とんがらかっちゃ駄目よ」「あゝそれなのに」「うちの女房にゃ髭がある」「朝」「椰子の実」「夜明けの唄」「春の唄」

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
33	S35.05.14(土)	22:00～22:45	揺らぐ大英帝国	古谷綱正 別当珣子 岡崎勝男 蜂谷輝雄	・昭和11、12年頃の英国に焦点を当てて描いていく。 ・東海テレビではなぜか「赤い灯青い灯」（昭和34年11月7日放送）を再放送。
34	S35.05.21(土)	22:00～22:45	盧溝橋畔戦火あがる	古谷綱正 別当珣子	東海テレビでは、他地域が前週放送した「揺らぐ大英帝国」を放送。以降も9月24日まで、他地域より1週間遅れでの放送となる。
35	S35.05.28(土)	22:00～22:45	再び戦火上海にとぶ	古谷綱正 別当珣子	
36	S35.06.04(土)	22:15～23:00（南海テレビ、山口テレビ、東海テレビは22:00～22:45)	戦火とどまるところを知らず	古谷綱正	・泥沼のような日中戦争の悪夢を記録フィルムによってつづる。 ・上海攻略のフィルムの中に、昭和12年10月6日戦死した新劇俳優友田恭助（田村秋子の夫君）の戦死直前の姿が写し出される。
37	S35.06.11(土)	22:00～22:45	蒋介石を相手とせず	古谷綱正 上村伸一	日中戦争の情勢下における武力戦の舞台裏—外交面の動きを記録フィルムを交えながらつづり、当時外務省アジア局第一課長であった上村伸一氏に古谷綱正が話を聞く。
38	S35.06.18(土)	22:00～22:45	徐州徐州と	古谷綱正 上月左知子 宮内重蔵 影山光洋	・毎日新聞東京版では、サブタイトルが「徐州徐州と人馬は進む」となっている。 ・朝日新聞名古屋版にのみ上月左知子の名前が記載。
39	S35.06.25(土)	22:00～22:45	変りゆく日本	古谷綱正 上月左知子 桝井園子 木村秀政	
40	S35.07.02(土)	22:00～22:45	ウィーンからプラーグへ	古谷綱正 上月左知子 中野五郎 諏訪務 洋子	テレビ西日本及び山口テレビではなぜか前週の「変りゆく日本」を再放送。
41	S35.07.09(土)	22:00～22:45	武漢めざして	古谷綱正 上月左知子 奥浜勇二郎 石川正夫	・テレビ西日本及び山口テレビでも「武漢めざして」を放送。「ウィーンからプラーグへ」は放送されなかった模様。 ・読売新聞東京版では、サブタイトルが「武漢をめざして」となっている。
42	S35.07.16(土)	22:00～22:45	武漢三鎮陥つ	古谷綱正 上月左知子 北村小松 高木孝司	
43	S35.07.23(土)	22:00～22:45	バイヤス湾上陸	古谷綱正 上月左知子 村上豊一 岡譲二	

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
44	S35.07.30(土)	22:00～22:45	愛国行進曲	古谷綱正 上月左知子 徳川夢声 広沢虎造 灰田勝彦 東海林太郎 岡晴夫 霧島昇	昭和12年から14年にかけてのなつかしのメロディーをたどる。
45	S35.08.06(土)	22:00～22:45	東亜新秩序	古谷綱正 今井武夫 中村豊一	
46	S35.08.13(土)	22:00～22:45	暗雲覆うヨーロッパ	古谷綱正	・ヨーロッパ新秩序の旋風下の昭和14年に入ってのヨーロッパの情勢。 ・3月のチェコ解体併合、スロバキアの保護領下、メーメル地方併合などを描き、ついにヒトラーの動きの焦点がポーランドに絞られる第二次世界大戦前夜の姿と、これに伴うヨーロッパ、アメリカ各国の動きを描く。
47	S35.08.20(土)	22:00～22:45	日英会談	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	
48	S35.08.27(土)	22:00～22:45	複雑怪奇	古谷綱正 上月左知子 金久保通雄 今井一男	
49	S35.09.03(土)	22:00～22:45	再び葬送行進曲	上月左知子 マリヤ・ユリ・ホエッカー 井口基成	
50	S35.09.10(土)	22:00～22:45	たそがれ戦争	古谷綱正 上月左知子 杉下裕次郎 南雲克太郎	昭和14年9月に第二次世界大戦が始まったが、ドイツ軍がポーランドをたちまち征服する間、英仏は手をこまねいているのみで、西方戦線ではドイツ軍と英仏軍がにらみ合ったまま動かないという奇妙な戦争状態が半年余り続いた。このいわゆる「たそがれ戦争」を記録フィルムで捉える。
51	S35.09.17(土)	22:00～22:45	ゼイタクは敵だ	古谷綱正 上月左知子	

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
52	S35.09.24(土)	22:00～22:45	あの時あの頃	古谷綱正 中山マサ 江戸川乱歩 今東光 横山隆一 川上哲治 古関裕而 源田実 山本嘉次郎 藤山寛美 横山エンタツ 花菱アチャコ 徳川夢声 関屋五十二 平林たい子 岡本太郎 滝沢修 亀井勝一郎 天津乙女	・いつもとは趣向を変え、昭和14、15年当時の日本人の精神生活と物質生活を、現在各界の第一線で活躍している人々の当時の生活を通じて描き、現在との距離感の中から、たくまざるユーモアと風刺を織り込もうという異色編。 ・20人を招いて当時の生活を語ってもらい、このインタビューを主にして、フィルムによって当時の社会の現実を描いたり、あるいは当時の流行歌を織り込んだりしながら、広い角度から昭和14、15年の社会全体の流れを捉える。 ・東海テレビではこの回は放送せず。
53	S35.10.01(土)	22:00～22:45	三八歩兵銃と戦艦大和	古谷綱正 福井静夫 森本軍蔵	・朝日新聞西部版では、サブタイトルが「三八式歩兵銃と戦艦大和」となっている。 ・この回から第80回「ロンメル・砂漠の鬼将軍」までの間、東海テレビでの他地域との放送の遅れがなくなる。
54	S35.10.08(土)	22:00～22:45	電撃戦	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	
55	S35.10.15(土)	22:00～22:45	フランス敗れたり	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	
56	S35.10.22(土)	22:00～22:45	大英帝国危うし	古谷綱正 上月左知子 卜部敏男	
57	S35.10.29(土)	22:00～22:45	紀元2600年	古谷綱正 上月左知子	
58	S35.11.05(土)	22:00～22:45	ねらわれるバルカン	古谷綱正 上月左知子 蜂谷輝雄	
59	S35.11.12(土)	22:00～22:45	生命線地中海	古谷綱正 上月左知子 中野五郎 実松譲	
60	S35.11.19(土)	22:00～22:45	日ソ中立条約	古谷綱正 長谷川進一 野村吉三郎 岩畔豪雄	朝日新聞西部版ではテレビ西日本の放送時間は22:00～22:34となっているが、誤植か。

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
61	S35.11.26(土)	22:00～22:45	独ソ開戦	古谷綱正 上月左知子 岩畔豪雄	
62	S35.12.03(土)	22:00～22:45	破局（南部仏印進駐）	古谷綱正 上月左知子 野村吉三郎	
63	S35.12.10(土)	22:00～22:45	謀略	古谷綱正 上月左知子 実松譲 中野五郎 カール・ケテルス ルドビック・クレンカモー ピーター・ウィリアムス 館敬介 今橋恒	・太平洋戦争直前に起こった国際謀略事件（ゾルゲ事件）を種々の資料を基にして、できるだけ真実に近い姿でドラマ化して送る。今回はこの事件の主役を演じたゾルゲとか尾崎秀美とか個人の動きを描くのではなく、日米関係が緊迫した当時の、国際謀略下の日本の姿を描こうというのが狙い。 ・ゾルゲ役に選ばれたタレントは、銀座のレストラン、ケテルスの主人カール・ケテルスさん。彼は日本生まれのドイツ人で、日本語とドイツ語がしゃべれるドイツ人という条件にぴったり。また、子どもの頃父親がやっていたバー・ラインゴールドへよくゾルゲがやってきたので、かすかではあるが”ゾルゲの風貌を覚えている”という彼は、ゾルゲの腹心クラウゼンには誕生日に家へ招かれたこともあるという因縁の持ち主でもある。 ・前にも一度、フジテレビでゾルゲ役をやったことはあるが、派手なことの嫌いなケテルスさんは、今度の出演もなかなか承諾しなかった。しかし、「顔を出さずにゾルゲのイメージを作り出したいのだから」という担当者の熱心な勧めで、やっと腰を上げたのだという。 ・構成：松田さえ子、演出：安藤勇二。配役は、ゾルゲ：カール・ケテルス、クラウゼン：ルドビック・クレンカモー、ブーケリッチ：ピーター・ウィリアムス、尾崎秀実：館敬介、宮城与徳：今橋恒　ほか。
64	S35.12.17(土)	22:00～22:45	蹶然たつの止むなきなり	古谷綱正 野村吉三郎	・朝日新聞名古屋版では、サブタイトルが前週の「謀略」となっているが、ゲストが野村吉三郎であるため、サブタイトルの誤植ではないかと思われる。 ・朝日新聞西部版では、サブタイトルが「決然起つのやむなきなり」となっている。
65	S35.12.24(土)	22:00～22:45	とんとんとんからりと隣組	服部良一 古賀政男 古関裕而 霧島昇 灰田勝彦 岡本敦郎 渡辺はま子 近藤圭子 フォー・コインズ 藤原歌劇団コーラス	クリスマス特別番組で、昭和12年から昭和16年に太平洋戦争が始まる頃までの流行歌を集めて送る。

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
66	S35.12.31(土)	22:00～23:00	「過ぎし日逝きし年　月月火水木金金」なつかしのメロディー	古谷綱正 上月左知子	・この番組のプロローグであった大正初期の第一次世界大戦当時から、現在まで放送してきた第二次世界大戦開始までの世相を歌で綴る風雪歌絵巻を、普段より放送時間を15分延長して送る。 ・数々の記録フィルムでこの間の歩みをドキュメンタリーに綴りながら、当時の流行歌60数曲がバックに流れる趣向で「カチューシャ」から「月月火水木金金」まで。
67	S36.01.07(土)	22:00～22:45	新高山登れ	古谷綱正 上月左知子 野村吉三郎 伊藤痴遊	・真珠湾攻撃が日本の騙し討ちであるという汚名は、野村大使がハル国務長官に日本の外交交渉の打ち切りを通告する前に行われたことにより生まれたわけであるが、この時間の差はいったいどうして生まれたのであろうか。 ・12月7日の日本大使館の情景、真珠湾攻撃及びそれに至るまでの日本艦隊の動きを、当時の記録フィルム、アニメーション、伊藤痴遊の講談でつづり、この時間の差がどうしてできたかを探る。
68	S36.01.14(土)	22:00～22:45	ドラマ「海軍」	古谷綱正 戸沢佑介 矢代京子 玉川伊佐男 荒木玉枝 小笠原良智 林孝一 飯坂幹	・真珠湾攻撃の巻で、岩田豊雄原作の「海軍」（脚色は沢村勉）をドラマ化したもの。 ・「海軍」は、特殊潜航艇の一員として真珠湾で戦死した青年少尉・谷真人（戸沢佑介）を主人公に、兵学校に憧れて勉強を続けた鹿児島の中学時代、厳しい訓練に明け暮れた江田島時代、更に真珠湾攻撃で死んでいった当時の若い世代の魂をうたおうというもの。ドラマの中心は、主人公の江田島・兵学校時代。 ・戸沢佑介ら出演者30数人は、昨年の暮れ、現地江田島へ乗り込み、水泳訓練、棒倒し、短艇訓練など、当時の江田島を再現、潜航の模様も「くろしお号」を使ってフィルムに収めたという。この約1週間にわたるロケを中心に、スタジオで撮影したが、特殊潜航艇も当時の設計図をもとにして作り上げた本物そっくりのものだそうだ。 ・毎日新聞東京版では、サブタイトルが「劇「海軍」」となっている。
69	S36.01.21(土)	22:00～22:45	大東亜戦争	古谷綱正 上月左知子 寺尾一郎	
70	S36.01.28(土)	22:00～22:45	日本快調の進撃	古谷綱正 上月左知子 水野文弥 流田群一郎 相川義仁	
71	S36.02.04(土)	22:00～22:45	疾風迅雷	古谷綱正 上月左知子 宮崎博晴 田村敏雄 岡田日出男	朝日新聞西部版ではテレビ西日本の放送時間は22:10～22:45となっているが、誤植か。
72	S36.02.11(土)	22:00～22:45	遺骨を抱いていま入るシンガポール	加藤幸治 吉武栄司 西山秀行	

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
73	S36.02.18(土)	22:00～22:45	南方わが手に陥つ	古谷綱正 上月左知子 上村軍治	
74	S36.02.25(土)	22:00～22:45	バタン・コレヒドール	古谷綱正 上月左知子 寺下辰夫	
75	S36.03.04(土)	22:00～22:45	印度洋を制して	古谷綱正 上月左知子	
76	S36.03.11(土)	22:00～22:45	最高潮	古谷綱正 上月左知子	
77	S36.03.18(土)	22:00～22:45	ミッドウェー海戦	古谷綱正 上月左知子 富永謙吾 伊藤痴遊	
78	S36.03.25(土)	22:00～22:45	浙贛作戦	古谷綱正 上月左知子 林保 畑七右衛門	
79	S36.04.01(土)	22:00～22:45	大東亜共栄圏	古谷綱正 上月左知子 樋口哲子 岩畔豪雄 藤原岩市	
80	S36.04.08(土)	22:00～22:45	ロンメル・砂漠の鬼将軍	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	・大分放送と東海テレビでは、なぜか第68回で放送された「ドラマ「海軍」」を放送。 ・この日からNHK総合テレビでは、人気番組「夢であいましょう」の放送が始まる。放送時間は22:00～22:30と、「風雪二十年」と競合。
81	S36.04.15(土)	22:00～22:45	交換船	古谷綱正 上月左知子 西川政一 寺尾一郎 実松譲	大分放送と東海テレビでは、第80回「ロンメル・砂漠の鬼将軍」を放送。以降、最終回まで１週間遅れで放送を行っている。
82	S36.04.22(土)	22:00～22:45	ガダルカナル	古谷綱正 上月左知子	
83	S36.04.29(土)	22:00～22:45	東西軌を一にして	古谷綱正 上月左知子	
84	S36.05.06(土)	22:00～22:45	エル・アラメインの後に敗北なし	古谷綱正 上月左知子	
85	S36.05.13(土)	22:00～22:45	レーダーとB17・科学技術のたたかい	古谷綱正 木村秀政 福井静夫	
86	S36.05.20(土)	22:00～22:45	ヒトラーまけたり・スターリングラードの悲劇	古谷綱正 上月左知子 伊藤痴遊	記録フィルムでスターリングラードの悲劇を再現する。

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
87	S36.05.27(土)	22:00～22:45	死闘つづく南東戦線	古谷綱正 上月左知子 遠藤安巳 田辺弥八	
88	S36.06.03(土)	22:00～22:45	悲劇南北に	古谷綱正 上月左知子	
89	S36.06.10(土)	22:00～22:45	絶対国防圏	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	
90	S36.06.17(土)	22:00～22:45	枢軸崩る	古谷綱正 上月左知子 日高信六郎 小野七郎	朝日新聞西部版では、サブタイトルが「枢軸崩れる」となっている。
91	S36.06.24(土)	22:00～22:45	玉砕	古谷綱正 上月左知子 友成佐市郎 大津留廉 平山幹雄	・昭和18年、イタリアが無条件降伏して枢軸から脱落したが、この頃から太平洋戦線におけるアメリカの戦力は増大する一方だった。特にラバウルに進出した第二艦隊がアメリカ空軍の攻撃に遭って壊滅したことは、日本にとって大きな衝撃であった。こうした当時の日米攻防の模様をラバウルとマキン、タラワに焦点を合わせて見せる。 ・山口テレビの放送時間は22:00～22:30
92	S36.07.01(土)	22:00～22:45	裏切られた軍隊	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	
93	S36.07.08(土)	22:00～22:45	秋風落莫	古谷綱正 上月左知子 酒井員成	
94	S36.07.15(土)	22:00～22:45	インパール	古谷綱正 上月左知子	
95	S36.07.22(土)	22:00～22:45	同期の桜	古谷綱正 徳川夢声 小唄勝太郎 ディック・ミネ 霧島昇 轟夕起子 玉川一郎 杉浦幸雄 大和球士	昭和17年から19年頃までの歌を集めて、思い出の歌を当時の歌手に歌ってもらいながら、玉川一郎、徳川夢声、轟夕起子、杉浦幸雄、大和球士らのゲストに語ってもらう。
96	S36.07.29(土)	22:00～22:45	絶対国防圏の夢消ゆ	古谷綱正 上月左知子 松岡哲夫夫妻	朝日新聞西部版では、サブタイトルが「絶対国防圏の夢潰ゆ」となっている。
97	S36.08.05(土)	22:00～22:45	北仏上陸作戦	古谷綱正 上月左知子	

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
98	S36.08.12(土)	22:00～22:45	ヒットラーを殺せ	古谷綱正 上月左知子 村松剛 中野五郎	
99	S36.08.19(土)	22:00～22:45	捷号作戦	古谷綱正 上月左知子	
100	S36.08.26(土)	22:00～22:45	あの歌あの頃	古谷綱正 五十嵐喜芳 村田英雄 榎本健一 松尾和子	
101	S36.09.02(土)	22:00～22:45	連合艦隊の最後	古谷綱正 上月左知子	
102	S36.09.09(土)	22:00～22:45	天王山レイテ	古谷綱正 上月左知子	
103	S36.09.16(土)	22:00～22:45	戦いは本土へ	古谷綱正 上月左知子	
104	S36.09.23(土)	22:00～22:45	硫黄島	古谷綱正 上月左知子 橘田信一	
105	S36.09.30(土)	22:00～22:45	ヤルタ会談	古谷綱正 上月左知子 大平善梧	
106	S36.10.07(土)	22:00～22:45	劇「桜花、悲願成らず」	古谷綱正 戸沢佑介 玉川伊佐男 緒方敏也 立川雄三 野々村潔 寺島幹夫 芝田秀勝	・今回はいつもと趣向を変え、桜花11型と言われた特殊兵器を中心に、戦争末期の特別攻撃隊の姿を描くドキュメンタリー・ドラマを送る。特攻隊の誕生から悲劇的な結末までを、若い特攻隊員の魂の慟哭を通じて描く。作は北村小松。 ・大部分をロケとミニチュアによる特殊撮影によって迫真力を高めようとしており、このため、宮城県岩波町にある航空自衛隊の矢ノ目吉に十日余りロケ、同基地で訓練中の関東各大学のパイロット約30人が特攻隊員としてエキストラ出演している。 ・一方、ミニチュア・セットによる特殊撮影では、一機二万円もするという一式陸攻の模型四機とプラスチック製の零戦十数機が、特攻火薬で木端微塵になるというもったいないシーンも撮影された。 ・配役は、岡村大佐：緒方敏也、野中少佐：立川雄三、足立少佐：寺島幹夫、土肥中尉：柴田秀勝　ほか。 ・朝日新聞名古屋版では、サブタイトルが「ドラマ「桜花悲願成らず」」となっている。
107	S36.10.14(土)	22:00～22:45	沖縄	古谷綱正 上月左知子 上地一史 長嶺藤子 山城興文	

回	放送日時	時間帯	サブタイトル	出演者	備考
108	S36.10.21(土)	22:00〜22:45	菊水作戦（沖縄）	古谷綱正 上月左知子 上地一史 長嶺藤子	
109	S36.10.28(土)	22:00〜22:45	破局	古谷綱正 上月左知子 上地一史 長嶺藤子 山城興文	
110	S36.11.04(土)	22:00〜22:45	敗戦	古谷綱正 上月左知子 中野五郎	朝日新聞大阪版では、サブタイトルが「無条件降伏」となっている。
111	S36.11.11(土)	22:00〜22:45	走馬灯	古谷綱正 上月左知子	最終回
／	S36.11.18(土)	22:00〜22:45	風雪二十年とその後	古谷綱正 上月左知子 長嶋茂雄 石垣綾子	
／	S36.11.25(土)	22:00〜22:45	蒸気からジェットへ（車の歴史）	古谷綱正 上月左知子 吉城肇蔚 永井義郎	・大分放送ではこの日、前週の「風雪二十年とその後」を放送したようである。よって、この回の「蒸気からジェットへ」は放送されなかった模様。 ・一方、東海テレビでは「蒸気からジェットへ」をこの日に放送している。11/18には最終回の「走馬灯」を放送しているため、「風雪二十年とその後」は東海テレビでは放送されなかったようである。

網掛け　：レギュラーホスト、ホステス

注１　本リストは、以下の新聞紙面及び書籍を参照して作成した。

【新聞】	【書籍】
・朝日新聞東京版、大阪版、西部版、名古屋版 ・読売新聞東京版 ・毎日新聞東京版	・『大衆とともに25年＜沿革史＞』 （日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編，1978） ・『テレビ夢50年　番組編①1953〜1960』 （日本テレビ50年史編集室編，2004） ・『古川ロッパ昭和日記　補完・晩年篇』 （滝大作監修，1989）

注２　本リストの出演者は、上記の参考文献から確実に把握できた人物だけを記載した。よって、当然のことながら、出演者が他にも存在する回が少なからずあると思われる。また、レギュラーホストとレギュラーホステスは実際には毎回出演している可能性が高いものの、いずれか片方のみの記載となっている放送回が多々存在する。

注３　本リスト作成に当たり、確認を行った各テレビ局の放送状況は下表のとおり。

地域	テレビ局	確認期間
関東広域圏	日本テレビ	全期間
近畿広域圏	読売テレビ	全期間
中京広域圏	東海テレビ	全期間
福岡県	テレビ西日本	全期間
山口県	山口テレビ	全期間
愛媛県	南海テレビ	〜S35.12.31
大分県	大分放送	S36.1.7〜

第２章　放送リスト解説

「日本の年輪　風雪二十年」について

１　放送リスト作成の経緯

平成２８年４月～平成３０年３月にかけて、ＢＳ１１にて「あのスターにもう一度逢いたい」（司会：宮本隆治、アシスタント：高野萌）という１時間番組が放送されていた。この番組は、昭和の大スターを毎回１人ずつ紹介していくという番組であったが、歌手が取り上げられる回が大半であった。

計１００回の放送のうち、筆者は数回分を観ただけに過ぎないが、第４９回の岡晴夫特集（平成２９年３月２８日放送）で使用された貴重映像が印象に残っている。岡の映像というと、昭和２０年代～３０年代前半にかけての映画出演と、晩年の昭和４４年～４５年に東京１２チャンネル（現・テレビ東京）「なつかしの歌声」に出演した歌唱映像しか現存していないと筆者は思い込んでいた。「なつかしの歌声」に出演している岡は、痩せこけた身体でやつれているのが印象的であったが、平成２９年３月２８日のこの日に放送された岡の白黒映像は筆者が初めて見るもので、「なつかしの歌声」の映像と比べ若々しく身体もふっくらと健康体であり驚いた。「上海の花売り娘」と「港シャンソン」を歌っていたのだが、映像提供は日本テレビとクレジットされていた。

この岡の映像について、「なつかしの歌声」研究の第一人者である林田雄一氏のブログ「日々是口実」には、昭和３５年に放送された「風雪二十年」という番組が出典ではないかとの推測記事が載っていた。「なつかしの歌声」の放送開始は昭和４３年で、現存する映像が残っているのは昭和４４年以降の放送分のみである。昭和４４年に放送されたテレビ番組の映像が現存しているということ自体貴重であるが、そこから更に１０年弱遡った昭和３５年のテレビ番組の映像が残っているとは露ほども思わず、強い驚きを覚えた。

また、第６７回の東海林太郎＆藤山一郎特集（平成２９年８月１日放送）において、東海林の「上海の街角で」と「お夏清十郎」の白黒の歌唱映像が流れたが、こちらも初めて見る映像であった（筆者は見逃したのだが、第５３回の放送で東海林の単独特集が組まれているため、第６７回の放送は総集編であったようだ。）。こちらも前述の林田氏のブログ記事によると、やはり「風雪二十年」の映像であろうとのことであった。

「風雪二十年」のことを少し調べたところ、番組の正式名は「日本の年輪　風雪二十年」であることと、基本的にはドキュメンタリー番組であり、たまに歌謡特集が組まれることがあったに過ぎないということが分かってきた。したがって歌謡番組ではないのだが、「なつかしの歌声」を筆頭とするなつメロテレビ番組が隆盛を極める昭和４０年代よりも前の時代に、どのような形でテレビにおいてなつメロ特集が組まれたのかということが気になった。そして、調べ上げるからには歌謡特集の回だけではなく、全放送回を調べようと決意した。以上が今回「日本の年輪　風雪二十年」の放送リストを作成しようと思い至った経緯である。

２　番組詳細

（１）日本テレビ社史

まずは、当番組の制作局である日本テレビの社史にどのように記載されているのかを紹介したい。

日本テレビでは昭和５３年に初の本格的な社史『大衆とともに２５年＜沿革史＞』が発行されたが、この本の中では、社会教養番組の一分野であるドキュメンタリー番組の１つとして紹介されている（同書１８３ページ）。また、巻末には２５年間の週間番組表が約半年ごとのスパンで断片的に掲載されているが、これを見ると、同番組のスポンサーは放送開始時から終了時まで一貫していすゞ自動車であったことが分かる。

そして、平成１６年発行の社史『テレビ夢５０年　番組編①１９５３～１９６０』においても、「昭和の変遷を多彩な記録フィルムで綴った（中略）「日本の過去・現在」を見つめる良質のドキュメンタリー」番組と紹介されている（同書４１ページ）。また、同じページには番組のスチール写真が掲載されており、次のように詳細な番組紹介がなされている。

> **『日本の年輪・風雪二十年』**
>
> 1959.10.3～1961.11.11（土）22:15～23:00
> 司会：田鶴浜弘、別当珣子
> 貴重な記録フィルムを駆使した＜映像で振り返る戦後の動乱史＞。ドラマ、座談会を織り混ぜたバラエティに富んだ構成が、単なる記録フィルムの寄せ集めに終わらないテレビならではのドキュメンタリーの方向性を示した。

この番組紹介には、放送期間と司会者が明記されているが、必ずしも正確な情報ではない。この点については、（２）～（４）で説明したい。

（２）放送期間

『テレビ夢５０年　番組編①１９５３～１９６０』には、放送期間は昭和３４年１０月３日～３６年１１月１１日と記載されており、これは正しい説明である。初回・最終回ともにサブタイトルは「走馬灯」である。

ただし、最終回の翌週の昭和３６年１１月１８日には同じ時間帯に「風雪二十年とその後」、翌々週の２５日には「蒸気からジェットへ（車の歴史）」という単発番組がそれぞれ放送されており、いずれもレギュラー陣の古谷綱正と上月左知子が出演している。よって、この２回の放送は同番組の派生番組と考えられるため、回数にカウントしない形で放送リストに記載した。

ちなみに、番組の開始を伝える各新聞テレビ欄には、放送期間は約１年半であるとの記載が見受けられる（昭和３４年１０月３日付読売新聞東京版朝刊、同日付毎日新聞東京版朝刊・夕刊、同月１７日付朝日新聞西部版・名古屋版朝刊）が、実際には２年２か月間放送された。番組開始時には１年半で終える予定だったのが、何らかの理由で放送期間を半年強延長したのだと考えられる。

（３）放送日時

『テレビ夢５０年　番組編①１９５３～１９６０』には、毎週土曜日２２：１５～２３：００に放送されたと記載されている。毎週土曜日に放送されたという記述は正しいものの、２２：１５～２３：００という時間帯はあくまでも初回の放送時間帯を指しており、第２回目以降はほとんどの回において２２：００～２２：４５に放送されている。

２２：００～２２：４５以外の時間帯で放送された回は、初回以外には第３６回（昭和３５年6月４日、２２：１５～２３：００）と、１５分拡大して放送した第６６回（昭和３５年１２月３１日、２２：００～２３：００）のみである。

（４）司会者

『テレビ夢５０年　番組編①１９５３～１９６０』には、田鶴浜弘と別当珣子の２人が司会者であったと記載されている。実際、放送初回の日の新聞テレビ欄には、同番組のレギュラーのホストが田鶴浜弘（元報知新聞記者で現在「ファイト」誌社長のスポーツ記者)、ホステスが別当珣子（大毎オリオンズ監督の別当薫夫人）と紹介されている（昭和３４年１０月３日付読売新聞・毎日新聞各東京版朝刊)。しかしながら、新聞テレビ欄の日時を進めていくと、田鶴浜弘が出演していることが確認できたのは第２０回（昭和３５年２月１３日）までで、第２５回（昭和３５年３月１９日）以降は古谷綱正がレギュラーホストとして出演している。別当珣子に関しては、出演していることが確認できたのは第３５回（昭和３５年5月２８日）までで、第３８回（昭和３５年6月１８日）以降は上月左知子がレギュラーホステスとなっている。

以上から、レギュラーホストに関しては、第２１回から第２５回、レギュラーホステスに関しては、第３６回から第３８回のそれぞれいずれかのタイミングで切り替わっていることが分かる。

（５）収録形態

当番組が生放送だったのか、それとも収録番組だったのかに関しては、社史や放送当時の新聞紙面に直接の言及はない。しかしながら、以下の材料から推測することができる。

その材料とは、『古川ロッパ昭和日記』の記載である。古川は当番組放送期間中の昭和３６年1月に亡くなっているが、第6回（昭和３４年１１月７日)、第１４回（昭和３５年1月２日)、第３２回（昭和３５年5月７日）と、番組前半期に計３回出演している。この際の出演の模様が古川の日記に記されている。

該当箇所を引用したい。まずは、昭和３４年１１月７日の日記より。

> 十一月七日（土曜）雨後曇
> ＮＴＶ「風雪二十年」。
> （中略）
> 九時三十何分、タクシー、ＮＴＶへ。「風雪二十年」の「赤い灯青い灯」の巻で、なつかしのメロディー式に、古いところを歌ふ。藤原義江・勝太郎・古賀政男・渡辺はま子等揃ってゐる。十時、本版となる。藤原義江、「どんと／＼」を歌ひ、その声のいゝこと、驚く。ところが、これは昔のレコードの由、ネタきいて、へゝエ、そんなこともやるのか。僕のところは、「たばこのめ／＼」と「アラビヤの歌」、

日記中の「九時三十何分」や「十時」というのは午後のことを指している。よって、この回は生放送であったことが分かる。

続いて、昭和３５年1月２日の日記より。

> 一月二日（土曜）晴
> ＮＴＶ「風雪二十年」ＶＤＴ。

（中略）
十一時半すぎ、タクシー、出る、ＮＴＶへ。「風雪二十年」、夢声・金語楼に、玉川一郎が司会役。僕は夢声のすゝめで、弁士の声音を三つ四つやることにする。スタヂオへ入り、本版、金語楼の落語「兵隊」が面白い。夢声のロイドの「巨人征服」の一部分説明から、僕が玉井旭洋・大辻司郎・大蔵貢・山野一郎・生駒雷遊を一寸づゝ鳴いた。これで了り、今夜も、家で淋しく飲む気だったが、片山君が来り、ＮＴＶの送り車で、津田も共に浅草へ。

日記中の「十一時半すぎ」というのは午前のことを指している。よって、この回は当日の昼に収録したものを夜に放送したことが分かる。

なお、古川は同番組の昭和３５年５月７日放送分にも出演しているが、前後の日の日記に記載はなく、出版する際にカットされたものと思われる。

以上より、当番組は生放送の回と事前収録の回の両方が存在していたということが分かる。筆者の推測に過ぎないが、放送開始のごく初期は生放送だったが、次第に事前収録に移行したのかもしれない。（社史『大衆とともに２５年＜沿革史＞』には、「開局後数年間は、フィルム、スタジオからの生放送、生中継だけの放送であったが、33 年 12 月、モノクロ用のＶＴＲ（Video tape recorder）が導入され、ＶＴＲ時代が開幕した。」（３９０ページ）との記述がある。）

（６）全国同時放送

朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱでは、朝日新聞の東京版・大阪版・西部（＝福岡）版・名古屋版の過去の各紙面を閲覧することができる。これを元に調べた結果、当番組は制作元の日本テレビ（関東広域圏）の他に、読売テレビ（近畿広域圏）、東海テレビ（中京広域圏）、テレビ西日本（福岡）、南海テレビ（愛媛）、山口テレビ（山口）及び大分放送（大分）で少なくとも放送されていたことが分かる。そして、これらの地方局においては、いずれも概ね関東広域圏と同時放送が行われていた。また、当時北海道に在住していた方が北海道放送で視聴していた旨を個人ブログに書いている（「日本テレビ「日本の年輪」の想い出」）。以上から、当番組は全国各地で同時放送が行われていたということを推察できる。

なお、概ね同時放送が行われていたものの、一部そうではない場合も散見された。確認できた範囲内で箇条書きしたい。

・東海テレビでは、第２回（昭和３４年１０月１０日）から放送を開始している。当番組の放送開始直前の９月２６日に伊勢湾台風が和歌山県に上陸し、東海地方では被害が生々しかった時期である。東海テレビで初回分が放送されなかったことに、このことが影響しているのかどうかは不明である。

・各地域で第３３回が放送された昭和３５年５月１４日の東海テレビでは、なぜか第６回分（昭和３４年１１月７日）を再放送している。以降東海テレビでは、同年９月２４日まで、他地域よりも１週間遅れで放送した。（よって、第５２回放送分は東海地方では放送されなかった。）

・各地域で第８１回が放送された昭和３６年４月１５日の大分放送及び東海テレビでは、なぜか前週の第８０回分を再放送している。以降大分放送及び東海テレビでは、第１１１回の最終回まで、他地域よりも１週間遅れで放送した。

・最終回の後の２回分の単発番組の放送に関して、大分放送では「蒸気からジェットへ（車の歴史)」が放送されていない。他方、東海テレビでは「風雪二十年とその後」が放送されていない。

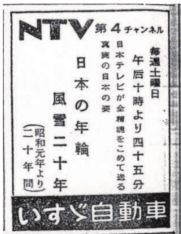
以上、放送リストと合わせてご確認いただければ幸いである。同時放送が行われていない事例が散見されるという事実からは、この番組が（生放送か事前収録かは別として）ＶＴＲに収録されていたということを推察できる。

（７）放送内容

社史『テレビ夢５０年　番組編①１９５３～１９６０』での紹介記事を（１）に載せたが、放送開始当時の新聞紙面にも次のように紹介されている。

> 昭和の初期から敗戦に至るまでの、昭和の二十年間の日本の動き、世界の動きを当時の数々の記録フィルムを使って約一年半にわたってつづる異色のドキュメンタリー「目で見る昭和史」。
> 全体としては「解説と記録フィルム」という構成をとるが、記録フィルムだけで、史実のつながらない場合は、ドラマの形をとったり、ゲストの懐旧談、当時のムードを再現する歌謡曲やファッションなどを組み入れ、バラエティーに富んだ構成にする。
> (昭和３４年１０月３日付読売新聞東京版朝刊)

> 昭和のはじめから敗戦までの二十年間の日本の動きや世界の移り変わりを約一年半にわたってつづる。
> (中略)
> 全体としては解説と記録フィルムを使う構成になるが、記録フィルムだけではむりな話題もあるので、そんなときにはドラマやゲストの懐旧談、当時のファッションや歌謡曲なども入れバラエティーに富んだものにしたいと制作担当の加登川教養部長は語っている。
> (昭和３４年１０月３日付毎日新聞東京版朝刊)

また、昭和３４年１０月１０日付読売新聞東京版夕刊５面に番組広告が載っているので、以下に図示したい。

番組のタイトルである「風雪二十年」の「二十年」が敗戦までの「昭和の二十年間」を指しているという事実が分かる。

そして、昭和３４年１０月３日付の読売・毎日両東京版朝刊の紹介記事のとおり２年２か月にわたって進行していったことが放送リストから読み取れる。

まず、「日本の動き、世界の動きを」とあるとおり、満州などの外地を含めた日本の動きを特集した回と、欧米列強の動きを特集した回とに区分される。総合的には、双方とも軍隊や軍部の動きを特集した回が多いように思われる。また、例えば第７回（昭和３４年１１月１４日）から第１０回（昭和３４年１２月５日）にかけて満州特集、第２６回（昭和３５年３月２６日）から第２７回（昭和３５年４月２日）にかけて昭和維新特集、といった具合に、１つのテーマを複数回で特集することも少なからず存在していたようである。

次に、「ドラマの形をとった」回である。ドキュメンタリー番組と言いながら、何人もの俳優が出演しドラマの形をとって放送された回がいくつも確認できる。特に、第６３回（昭和３５年１２月１０日）、第６８回（昭和３６年1月１４日）、第１０６回（昭和３６年１０月７日）の各放送分に関しては、新聞紙面に詳細な紹介記事が載っており、詳しく放送内容を記述することができた。なお、当時はテレビドラマと言えば収録にＶＴＲではなくフィルムを使っていた時代であり、本番組においてもフィルムが使われている。

最後に、筆者が当番組の放送リストを作成するきっかけとなった「歌謡曲」を特集した回を紹介する。

古川ロッパが日記に記した第６回（昭和３４年１１月７日）がその最初で、以降第３２回（昭和３５年５月７日）、第４４回（昭和３５年７月３０日）、第６５回（昭和３５年１２月２４日）、第９５回（昭和３６年７月２２日）、第１００回（昭和３６年８月２６日）と、歌手が出演して歌声を披露した回は計６回である。わずか6回であるが、当番組がドキュメンタリー番組であることを考えると、“６回も”と表現した方がよいだろう。（なお、「芸能関係の特集」と定義範囲を拡げると、第１４回（昭和３５年1月２日）や第２４回（昭和３５年3月１２日）もカウントされることとなり、更に増える。）

第１章で言及した岡晴夫と東海林太郎は、第４４回（昭和３５年７月３０日）に出演している。同日の毎日新聞東京版夕刊には、「昭和十二年から十四年にかけてのなつかしのメロディーをたどる」と紹介されており、岡が歌った「上海の花売り娘」と「港シャンソン」はいずれも昭和１４年、東海林が歌った「上海の街角で」が昭和１３年、「お夏清十郎」が昭和１１年の作品であることを考えると、この日の映像である可能性が高いと言えるのではないだろうか。

３　番組が放送された昭和３０年代半ばという時代

当番組が放送開始してまもない昭和３４年１１月１４日付朝日新聞西部版朝刊のテレビ欄に、「ハンランする戦記物」と題する興味深いコラムが掲載されている。このコラムでは、「日本の年輪　風雪二十年」以外にも、フジテレビ「これが真実だ」、東京テレビ（現・ＴＢＳテレビ）「昭和軍閥史」など、戦争回顧物のテレビ番組がこのところ目立ってきたことを伝えている。同記事によると、ラジオ番組も同様の傾向にあるという。他にも、日本教育テレビ（現・テレビ朝日）では「太平洋戦争」が昭和３５年１０月から、東京

テレビでは「チャーチルの大戦回顧録」が昭和３６年５月からそれぞれスタートしているし、ＮＨＫ総合テレビでは「世紀の記録」という、アメリカＣＢＳとイギリスＡＢＣの両放送局が提供する、２０世紀に入ってからの戦争を中心に世界中の色々な事件を収めた記録映画の番組が昭和３５年４月にスタートしている。

　戦争回顧物の番組だけでなく、流行歌を題材とした回顧物の番組も多数登場している。テレビではＮＨＫの「歌は生きている」が昭和３５年４月にスタートし、日本教育テレビでは「歌謡百年」が昭和３６年４月にスタート（先述の「太平洋戦争」の後続で、東京１２チャンネルが昭和４０年に放送した同名番組とは別物）している。ラジオでも文化放送の「あの夢この歌」が昭和３５年１１月にスタートしている。昭和３０年代半ばのこの時期には、まだ「なつメロ」という用語は普及しておらず、代わりに「なつかしのメロディー」という用語がしきりに使われている。そして流行歌界では、若手歌手が戦前の歌を現代風のリズムにアレンジして再登場させる「リバイバル・ブーム」の真っ只中であった。

　昭和４０年代に入ると、東京１２チャンネルの番組に限定しただけでも、回顧物の番組として「私の昭和史」や「人に歴史あり」が登場しているし、なつメロブームの引き金になった「なつかしの歌声」も登場している。そして、明治維新から１００年になることを祝う「明治百年」のブームが起きたのも昭和４０年代に入ってからである。今回、「日本の年輪　風雪二十年」の放送リストを作成していく過程で、既に昭和３０年代半ばのこの時代に、戦前を回顧する強い流れが生まれていたことが実感できた。昭和３０年代半ばのこの流れが４０年代に向かってどのように繋がっていったのかを検証することには深い意義があると思われる。今後の課題としていきたい。

４　参考文献

（１）新聞

「朝日新聞」東京版、大阪版、西部版、名古屋版
「読売新聞」東京版
「毎日新聞」東京版

（２）書籍

『大衆とともに２５年＜沿革史＞』（日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編，1978）
『テレビ夢５０年　番組編①１９５３～１９６０』（日本テレビ５０年史編集室編，2004）
『古川ロッパ昭和日記　補完・晩年篇』（古川ロッパ著・滝大作監修，1989）

（３）ウェブサイト

「あのスターにもう一度逢いたい」番組公式サイト（令和２年９月２２日確認）
https://www.bs11.jp/entertainment/anostar/
「日々是口実」（平成２９年４月２６日確認）
https://plaza.rakuten.co.jp/torazou/
「日本テレビ『日本の年輪』の想い出」
https://ameblo.jp/sayamayotarou/entry-12086221460.html（令和２年９月２２日確認）